

りたるが被告瀬戸廉吉を使喚したる被告松尾隆喜は何故か此の現場を外して前後の始末を伺ひ居りたると覺れり此時來りて自己机の前に表れて言ふ様「あれ文君は約束して解決に責任を負ふと言ひながら何處となく使をやつても一つも來ないなんて怪からぬじやないかだが兎に角貸金は押引して呉れてやるから始末書を書け」と言ひたり此時告訴人を氣遣つて後を逐ひ來たりたる告訴人の妻及友人村本福利が告訴人の所在を直指し居るに被告瀬戸廉吉は其村本に向ひても「昨日の宮本の手紙は君が書いたのか」と問ひ掛けたるが企人が「いや僕は知りませんが」と答へたので「それは誰が書いたのか」と再問したるが其儘前記森田松次の件につき始末書を書き入れることを告訴人に迫りたるが此時全事務室左側中央に居らるゝ村本及告訴人等の背後に在つて兩人を監視し居りたる頭記參考人勞務係某々二名は被告松尾隆喜が何か意味あり

げなる目配りに應じて立ち直ちに全事務所表入口及裏入口を締切りたり然る後被告松尾隆喜は更りたる威壓的態度を示しつゝ始末書を書く事を強要したり依て告訴人は「腕を打たれて到底書けな」と答へたるに「それでは君書け」と村本福利に向ひて押付けたり。そこで告訴人と村本は互に見合せて躊躇したるに被告松尾隆喜は村本の身邊近く自己の椅子を持ちかゝえて迫り他頭記參考人某々勞務係二人と共に威嚇的態度を作爲しつゝ「君が書けるぢやないかさあ書け」と重ねて強制すれば村本は「仕方がない」と厭々の聲に答へたるに被告松尾は「おい紙と筆を持って來い」と命じて十七八才位の男女兩給仕に選ばせて「さあ書け俺の言ふ通りに書け」と口述を初めたり參考人村本福利には再參變更或は前後除加せられる其口述を幸ふして書き換へながら罫紙二枚目に次の如く書き終へたり「私儀今般森田松次の件に付延引致候段御寛大